

大西さんとの出会いは、京都大学大学院の原子核理論研究室に進学した1991年春でした。研究室では春秋にハイキング行事があり、春は清滝でバスを降りて愛宕山に登りました。当日は良い天気、持参したお弁当に加えてスタッフからお裾分けをいただき、皆で車座になって食べました。大西さんが輪の中心となって語っている写真があります。秋のハイキングは、宇治の方に行きました。コースの確認する私をよそに、参加された新人秘書さんの横で少しはしゃいでいる大西さんの写真もあります。院生合宿という勉強会もあり、その年は奈良の川湯温泉にドライブがてら出かけて、各自が準備したレジメで発表と議論を行いました。ぼたん鍋と温泉も堪能し、吉野神宮を参詣して、川下りまでしました。翌春の菅沼さんの結婚披露宴の写真では、大西さんの茶目っ気が見られます。

この年のD3は、大西さん菅沼さん福井さんという豪華メンバーで、何も知らずにM1として入った私は、自分が4年後に彼らのようになれるのだろうか？と不安に感じました。研究室での大西さんは、タバコをくゆらせつつ、端末のキーボードを猛烈にバシバシ叩いておられました。普段は、だれにも笑顔と明るい言葉で接してくださいました。あるときには「ハドロン物理に興味があるなら、素粒子論の人に負けないくらい場の理論を勉強せなあかんよ」と私に助言されました。また、海外研究者によるセミナーが研究室であったときにも、大西さんは独特の巻舌英語ですぐに質問をされて、それを見た私は自分もD3の頃にはああいう風になれるのか？とプレッシャーを感じました。

大西さんは自分が興味を持たれることにどんどん進んで行かれる方でした。院生当時は、VUU輸送方程式で重イオン反応と核物質の研究をされていたように記憶しています。それから RCNP、すぐに北大へ赴任、しばらくして京大基研に戻って来られて、という異動の間に研究対象をどんどん広げていかれて、対象は核物理のほとんどを網羅するくらいに広がっていました。興味が広すぎるので、例えば、研究会での講演スライドに大西さんが描く QCD 相図には、本当にたくさん書き込みがあります。そしてそれを元にたくさん喋って、講演後に「あーっ、またいい加減なことをたくさん言ってしまったあ」と笑っておられました。

大西さんは、解明したい物理のためにいろいろな理論手法を編み出し工夫するタイプの理論物理研究者だったと思います。そしてその姿を見せつけられた後輩や学生たちに、すわ自分も、と思わせてくれる頼もしい先輩でした。これからも、多くの後輩研究者が大西さんの陰を追いかけ、追い抜くべく、どんどん研究成果を上げていくことと思います。

謹んで大西さんのご冥福をお祈り申し上げます。

藤井 宏次 (東京大学)